

今は、次男一家の世話になって、静かに老境を過ごしています。

思い起こせば、弥栄村では村長さんをはじめ、幹部の方々がしっかりとっておられて、よくまとまって村民を指導して頂き、避難行でも、より安全な地域に引率、移動させて頂いたおかげで、他の多くの開拓団のような残留孤児を出すこともなく、危険な目に遭うことも少なく、心から感謝しています。

もちろん、日本へ引き揚げる間に、多数の尊い犠牲者が出ました。しかし、それは食糧事情と衛生事情によるもので致し方のないことと思われませんが、それにしても申し訳ない気持ちでいっぱいです。

ハルビンからの引揚げ

埼玉県 鷹 澤 三枝子

私の父、上谷正道は明治三十三（一九〇〇）年に京都府の丹後町に生まれましたが、大正八（一九一九）年神戸の神港商業学校を卒業するとすぐに、当時いとこの相見幸八が経営していたハルビンの高岡号（株）に、資金二千元を持って共同経営者として入社しました。大正五年に神戸高商を卒業した父の長兄、すなわち私にとっては伯父になる人が、翌年に朝鮮の京城（ソウル）で腸チフスで亡くなっていたので、その代わりということでもあったようです。

明治三十八年に日露戦争が終わり、明治四十年には長崎、ウラジオストク間に定期航路が開かれ、高岡号（株）はウラジオストクで日露貿易の事業を進めていました。大正六年に、当時のロシア

政權のロマノフ王朝が二月革命によって崩壊し、社会主義政權が成立すると、自由貿易が禁止され止むなくハルビンに事業の本拠を移し、日中貿易の総合商社として事業を再開していたのです。

日露戦争後すぐに、大叔父が大連の駅前で商売を手広く経営していて、その関係から高岡号(株)には同郷の社員が数十人もいて、父は何の抵抗感もなく在留邦人社会へ溶け込んで働き、その傍らでロシア語、中国語を学び、商人としての道を歩み出していました。

ロシア語を専門としているハルビン学院は、大正九年に創立、そして私たちが学んだ桃山小学校は、明治四十二年の創立でした。その年の十月には、韓国統監だった伊藤博文公が、ハルビン駅頭で凶弾に倒れるという事件が起きたが、そのときに伊藤公に応急手当を施した医者の方虎之助先生が、初代校長でした。

大正十二年には、満鉄と居留民会が二分の二つの資金を出して新しい校舎を建て、その後生徒

は増え続けて、終戦時には千二百数十人を数えるようになりましたが、第三十九期生をもって閉校となり、消滅してしまいました。

我が家では、昭和五(一九三〇)年生まれの長兄を筆頭に、昭和六年に姉、そして昭和九年に私が入るハルビンで生まれ、次いで妹、弟、妹と下三人は牡丹江(ポダリヤン)生まれで、六人の兄弟姉妹は全員満州生まれの満州育ちとなりました。

昭和十六年、太平洋戦争の始まった年に父は専務となり、牡丹江支店に勤務し、支店のビル内に住んでいました。一階が事業所、二、三階が社宅となっていました。すぐ先の太平路には百貨店があり、社員、その家族子弟を合わせると約二百人以上が生活をしていました。

十二月八日開戦の日の四時限目の授業は、海軍出身の森先生がアジアの大きな地図を広げて、なぜに戦争になったのか、日本が置かれている国際関係についての授業でした。アメリカは、東南アジアの石油や資源を日本に売らなくなり、おとな

しくしていると日本も植民地になってしまう。資源を輸入できなくなつて弱い国になり、自分の力で自分の国を守ることができなくなる。そうなる
と戦争するしか解決の方法が無くなつてしまふ、
という内容だつたと覚えていますが、その先生も
翌年出征し、戦死されてしまいました。そのとき
子供心に、強い国は皆日本に優しくないのでなあ
と思ひました。家で、母が「大きな国と戦争して
負けやしないかしらね」と父に言うのと、父は「何
を言つてるんだ。日本は大丈夫だよ」と言うの
で、父のその言葉で安心はしましたが、それでも
それからの日本の国力では戦争に勝てるような状
況ではなく、私たちは何も事実は知らされずに、
ただ五族協和のみを信じていました。

この時期、高岡号(株)はハルビンに本店、牡丹
江、佳木斯、遼陽、図們、チチハル、そして綏
芬河に支店があり、中国語のできる若い社員が活
躍し、家族を合わせると会社全体で約四百人以上
の日系人と、多数の満州族の人たちがいました。

私たちの後ろ盾には関東軍がいて、満州国の治安
を維持していました。中国でも、国民党と八路軍
の攻防が地下で続いており、中国の人たちも多く
が生活苦にあえいでいました。

父の転勤に伴つて、昭和十八年の春にはハルビ
ンの本店に移つて、一家は引越しをしました
が、この年の秋に、父が四十四歳の若さで病没
し、中学二年の長兄を筆頭に、小学生三人、幼児
二人の母子家庭となつてしまいました。会社はま
だ戦争の影響はあまり感じられずに、私たち一家
の生活も安泰でした。祖国の保護、会社の組織、
生命保険の保険金、それに父の遺産などの庇護に
よつて、それまでとほぼ変わらない日常生活が続
けられていました。

街には白系ロシア人、満族、それに日本人が住
み、ロシア寺院、極楽寺、モスク、シナゴーク、
本願寺があり、それぞれの民族社会を形成し、ま
たハルビン工大、医大、中学校、二つの女学校、
四つの小学校があり、私も小学四年生からロシア

語を学び、ワシリー先生の教室に通っていました。先生は親日家で、昔のロシアを懐かしんでいました。

そのころは、ソ連本国に帰ると、裕福な家庭やキリスト教信者であつたりすると、すぐにシベリア送りが待つていて、多くのロシア人はハルビン永住を望んでいたもので、満州国政権はそのような人たちや、そのボーダレス上で生きている人たちに對して、ひと時の平和を保証していました。

しかし戦局も段々と歩が悪くなり、山本五十六大将の戦死が伝わるころになると、会社にも中国人が次々に来て、「何でもよいから食べ物か、着る物を持ってくれ」と言つて、使い古された大量の紙幣と交換に品物を持って行くようになり、会社では紙幣を麻袋に詰め込んで、横浜正金銀行へ運んでいました。さらに昭和十九年に山本大将の後任の古賀峯一大将が戦死すると、また同じ状況になりました。

中国社会は国力と紙幣に敏感に反応して生きて

いました。満州国の終わりが近いことを予見していたようで、それに対応するための生活術も心得ていました。ソ連軍、国府軍、八路軍、それに広大な大陸に潜在する欧米の圧力によつて、関東軍は勝利の望みも薄い両面作戦に追い込まれて、敗戦に向かつて一路突き進んで行きました。

昭和二十年二月になると、父の子飼いだつた若い社員の東、花満の二人が次々に出征して行き、牡丹江支店の社員であつたいとこの藤之助兄と、稔兄も出征してしまいました。学校の若い先生もほとんど見受けられなくなり、四十歳以上の男の先生と女の先生ばかりになりました。私の担任の先生のご主人も、六月にニューギニアで戦死されるなど、暗いニュースしか伝わつてこなくなりました。五年生になつてからの授業も、週の半分は乾パンを包装する勤勞奉仕や、校庭の防空壕掘りでした。兄は、飛行機製作所での部品造りに、姉は軍の縫製工場に、それぞれ学徒動員で勉強どころでは無くなりました。幸いにも、まだ我が家の

食卓には急激な変化はありませんでした。

私の住んでいた会社のビルは、昭和六年にソフィスカヤ寺院の敷地内に会社の本店ビルとして建てられた四階建てのビルで、埠頭区石頭道街の中心部にあつて、斜め向かいには市庁舎、ビルの前はバザール広場で、邦人の百貨店が二つありました。また、病院や居留民会もすぐ近くで便利な所でした。

夏休みに入ると、隣組からの連絡で空襲に備えて食料品や毛布などを地下室に備蓄しました。爆撃を受けるとビルの下敷きになるのかなどと思うと、どんな明日が待っているのかと想像するだけでも恐ろしくなりました。

八月九日の夜、突如として警報が鳴り、ちょうど入浴中だった私は、湯舟から飛び出し濡れた体に急いで服を着て窓から空を見ると、ソフィスカヤ寺院の上空に照明弾が二つ上がつていて、折からの満月と重なり夜空が明るく、街の様子が手に取る如くに見えました。このような中でソ連軍が

攻めて来たら、生きてはいられないと思い、地下室に逃げても無駄だという気がしましたが、そのうちに警報は解除されました。

八月十一日の昼ごろになって、本格的にソ連軍が攻めて来たので、牡丹江支店にいた、いとこの喜代野さんが子供を抱え、出征した稔兄の家族や大勢の社員の家族と共に、着の身着のままの姿で避難して来ました。ほとんどが女、子供で、それに年寄りの社員が数十人で、ビルはたちまちに満杯になりました。このとき国境近くの街、綏芬河にあった支店の松田さん一家は、ハルビンまでたどり着けずに、幼い子供と共に一家四人が消息を絶つたのでした。

会社の方針によつて、本社ビルに全社員が住むのは不可能で、さらにハルビンも市街戦になる危険性があるので、大半の社員家族は遼陽支店に向かうよう示されました。しかし我が家では大連の气象台に伯父がいるので、そこまで行って、そこから日本に帰るしか道は無いと母が判断して、八

月十二日に姉妹の二人が、先発隊としてハルビンを出発し大連に向かいました。中学四年生の兄は、学校の命令で都市防衛のために残ることになりました。会社も混乱状態になり、各家庭の生活は各人の自己判断によることとなりました。

十三日には母と私、それに六歳の弟と四歳の妹は、兄の家庭教師であったハルビン工科大学生の一家と行動を共にすることとなり、南下しました。その家のご主人が満鉄社員だったので、幸いに南下する列車に便乗させてもらうことができ、水筒のほかはこれという荷物も持たずに出発しました。明日の運命はもうだれにも分からないことでしたが、これから先は成るようにはしかならないと覚悟を決めていました。

母も、私が病弱であり、弟、妹は幼かったたので、「死ぬときは、皆一緒ね」と、覚悟を決めていたようでした。私も生きられるだけ生き抜いて、あとは運を天に任せて、祖父の待つ丹後に帰るしか無いと覚悟を決めていました。

乗り込んだ貨物列車は、棧の付いた窓が四つあり、床にはごしが敷かれていましたが、体を小さくして横になっても人がいっぱいいて、手足を伸ばすことはできません。列車は大平原を走っていますが、暗い貨車の中は照りつける太陽で熱く、飲み水はすぐに無くなり、だれも押し黙ったまま。明日の不安を考えているようでした。

三時間ぐらい走っていると、列車は小さな駅の引込線に入り、動かなくなりました。どうしたのかと思っていると、向かい側の線路を、大砲や戦車や武装した兵士を乗せた軍用列車が、次々と北へ向かって走り去って行きました。私たちの貨物列車はいつになっても動かずに、結局二日二晩もここで過ごしました。

八月十五日、昼過ぎになると「戦争が終わりましたので、これからハルビンに戻ります」という知らせが入りました。母たちは、何となくほっとした様子で体を伸ばしていました。私も家に帰ることができると分かり、嬉しく思ったものでし

た。やっと列車が動き出し、二時間ほど逆送してハルビン駅に着きました。

下車して夕暮れの市街に出ると、何となく騒然としていて、今までに感じたことの無いような殺気を感じました。私は弟の手をしっかりと引つ張りながら母を見ると、母は「目を合わせないようにして、下を向いて歩きなさい」と、耳打ちをしました。私は胸の高鳴りを押さえながら、「お父様、私たちをしっかり守って下さい。家まで無事に帰ることが出来ますように！」と、一生懸命に祈りながら家に急ぎました。私の願いが聞き届けられたのか、明るいうちに無事に家に帰ることができ、安堵感を味わいながら白いシーツの上に横になり、生きて再び我が家で眠れる幸せに感謝しました。熱くて苦しく、長い二日間でした。

翌日目が覚めると、私の前には満州国の崩壊、関東軍の消滅、祖国からの捨民、命の保障の無い危険な大陸に投げ出され、敗戦という戦いの始まりが待っていました。住居、金品、労働力、命、

若い女、幼児、邦人の持ち物すべてが、ソ連軍の戦利品になってしまいました。

数日すると、マンドリンと称する自動小銃を持った囚人あがりのソ連兵が、家の鍵を壊して侵入して来て、土足で畳の上を歩き、私が大事にしていた小さなハンドバックを取り上げてこじ開けましたが、中に何も入っていなかったため、放り投げていました。酒の瓶と、兄の短刀、それに毛皮などを強奪して出て行きました。一日に何回も入れ代わり立ち代わり来ましたが、防ぎようの無いことでした。力を失った敗戦国民は、様々な屈辱を受けねばなりません。朝鮮人の男がソ連兵を先導して入り、手当たり次第に荷物コトモノを行李コトモノに詰め込みました。今日はミシンの頭を持ち去り、翌日は同じ顔ぶれでミシンの足を持ち出しました。

街を歩くと、男たちは銃を突き付けられて、腕時計とか万年筆を奪われ、若い女たちは野獣化したソ連兵に襲われて、命を絶つ人が続出し、ハル

ピンは一拳に恐怖の街と化しました。これまで一種のあこがれを持って付き合ひ、素晴らしい音楽などを聴かせてくれた、清潔なハルビンのロシア人とは全く違ったソ連人でした。ソ連兵は計算もできず、文盲であつてもマンドリン銃の扱いには慣れていて、それを振り回すので、日本人は追ひ回されていきました。かつて話された森先生の予告は現実のものとなり、やはり弱い国にはなりたく無いとしみじみ感じました。

九月になると、略奪が少しは下火になつてきましたので、久しぶりにお風呂を沸かそうと、兄が石炭殻を捨てに一階まで降りて行きました。するとソ連兵が待ち構えていて、シャツ一枚スリッパ履きの姿で、兄は連行されてしまいました。十六歳の少年を何に使うつもりであつたのか。先行して大連に行った姉たちとも連絡はとれず音信不通となり、これからの事をいくら考えても不安ばかりが広がつて、何の解決策もありませんでした。このころになると、国境方面から命からがらで避

難してきた同胞の姿が、多く見受けられるようになってきました。避難民は麻袋やこもをまとひ、今までに見たことも無い無惨な姿で、ハルビンを目的地としてたどり着き、桃山小学校などに収容されました。地段街の登喜和百貨店も収容所となりました。領事館員の子供の木村君も住んでいたビルが接収されて、同じ並びの山路君の家に同居していました。

止まるところを知らない大勢の避難民の流入で、市街の衛生状態は極度に悪くなり、疫病がまん延してきました。遂に我が家でも、妹が赤痢に取りつかれました。梅肉エキス、ニンニクなど考えられる限りのあらゆる手当てをしましたが、血便は止まらず日増しに衰弱していくばかりでした。敗戦と同時に、医療施設は閉鎖接収され、医者も姿を消してしまひ、仕方なく中国医薬の「黒い丸薬」を飲ませましたが、何の効果もなく衰弱し切つてしまひ、重湯を口に運んでももう口も目も開けられなくなりました。母に「三枝子、どう

しよう」と言われても、私は何とも答えられませんでした。元気に裸で日向ぼっこをしていた末妹が、もうすぐに死ぬのかしらと思うと、体が震えてきました。母は、娘の一大事とばかりに八方手を尽くして、やっと父の主治医だった満鉄の花田先生を捜し出し、診察を受けることができました。先生は、「もう二、三日遅かったら助からなかった。確約はできませんが、是非、トリアノンという肺炎の特効薬を探して来て下さい。それよりほかに方法はありません」と言われました。

母はすぐに、戦前に会社との取引で親しかった王さんを見つけ出し、「どうしてもトリアノンという薬を探して下さい」と頼みました。あのような大混乱の中でも、探せば貴重な薬を手に入れることができたのです。危険と併在する国際都市においても、予測のつかない可能性があったのです。ほどなくして薬が見つかるかと、母は惜しげもなくトリアノンのアンブル四本と、光り輝くルーブル金貨を交換しました。そのころでも、金貨一

枚あれば家族が一年は暮らせる価値がありました。隣家の中内家からも、二十粒のトリアノン錠剤を、父の愛用していたライカの写真機と交換しました。

薬の効果は絶大で、投薬の翌日にはあれほど悩まされていた血便がぴたりと止まりました。近代医学の劇的な福音は、まるで夢を見ているようで、一生忘れることのできない思い出となりました。死の淵から蘇った妹に、亡き父の強い生命力が宿っていることを感じないわけにはいかなかったし、多くの人たちとの奇縁に感謝しました。

妹が快方に向かいほっとする間もなく、今度は元氣印だった母が発疹チフスにかかり、私は四人の食事の世話と食器などの煮沸消毒で毎日夢中で過ごしました。しかし、一難去ってまた一難の通り、衰弱していた妹の体には特効薬が強過ぎたらしく、妹のものもの注射の跡に五円玉ぐらいの穴があき、そこから膿汁がはじめて、私は妹を背負って隣のビルにある有賀病院に行きました。麻酔薬

無しに傷口からリンパ腺まで器具を通す過酷な治療に立ち会わねばならず、泣き叫ぶ妹の足を押さえながら一緒になって泣き、涙を振り払いながらも、どうしても妹を助けなければと、ただそののみで頭がいつぱいになっていました。幸いにリンパ腺は化膿していなかったので、リバガーゼを五十枚ぐらい詰めて、治療は終わりました。さらに辛いことには、食事が喉を通るようになり、栄養補給ができたので日を追うごとに傷口の肉が盛り上がり、それに伴ってリバガーゼの枚数も減って、段々と快方に向かいましたが、傷跡は残ってしまいました。やっと死神から妹を取り戻すことができました。

有賀病院は外科の病院でしたが、牡丹江の円明小学校二年のときの担任であった寺井先生は、居留民会の近くの妹さんの家に避難されていて、八月に出産されたばかりの妹さんの赤ちゃんを背負った姿で、病院の玄関で思わぬ出会いをしました。妹さんは終戦の大混乱の中で出産しました

が、ご主人は出征中でだれも面倒をみる人も無く、この病院で亡くなられたとのことでした。翌年の引揚げで先生はその忘れ形見を大切に守って日本に帰りましたが、博多へ上陸の直後に亡くなられ、故郷に帰ることはできなかったとのことでした。この時期病気にかかり、薬が必要となっても入手する手段が閉ざされていました。医者と薬があれば生きられたはずの多くの同胞が、次々と命を落とす悲劇に見舞われたのです。

九月の終わりが、市街東の中国人街から西のキタイスカヤへ向かって、三人の日本人男性が、前と後ろに罪状を書いた板をぶら下げられて、銅鑼や太鼓を鳴らしながら歩く中国人の団に追い立てられるようにして通って行きました。その人たちは、暴行を受けて顔が腫れあがっていました。その行列はスنگアリーに行き、そして三人の日本人を銃殺しました。

社長の友人で、ウラジオストク以来国威高揚の道を共に歩んできた、ハルビンを代表する事業

家である「ニューハルビンホテル」の近藤氏や佐賀氏、それに商工会の重鎮の人など六人も連行されて、戦犯という名目で処刑され、さらに領事館の上席の方も同様な運命に遭って消されてしまいました。また一方で、スターリンによる「クレムリンの血の粛正」が吹き荒れ、次々と白系ロシアの実業家たちも姿を消していきました。

私たちは、ただ息を潜めて時の過ぎるのを待つしかありませんでした。どんなに理不尽なことでも、勝者は正であり敗者は悪として、子供であっても断罪されていました。

十一月初め、氷が張るような冷え込んだ朝のこと、九月にスリッパに夏シャツ一枚の姿でソ連兵に連行された兄が、真っ黒な顔で、ひげや髪は伸び放題で、知人にもらったという綿入れの支那服に汚れた軍靴を履き、体中は虱とノミだらけになり、針金の掛かったすすけて真っ黒になったブリキ缶を提げただけの乞食姿で帰って来ました。

男狩りで集められた兄たちは牡丹江に連行さ

れ、そこでソ連軍が満州各地から戦利品として没収した機械設備や食料品、その他の諸物資をシベリアへ送る積荷作業の使役に使われていたそうです。一日の食糧は、脱穀していない高粱が湯飲み一杯ほどで、開拓団が残っていた畑の大根などで飢えをしのいでいましたが、みんな腹の具合を悪くしたそうです。兄は、飢餓状態解放のため蜂蜜のつぼを空にし、それにいつもピーナッツ、ひまわりの種、すいかの種、胡麻飴などを入れて食べ続けていたので、若さの賜物で健康を取り戻していました。

男狩りの犠牲になった集団は、兄のような何も知らない少年や老人たちで、弱い人を酷使して使っていたので、帰された後に体調を崩して、多くの人たちが死に追いやられ、家畜のような扱いだったそうです。戦争が終わりほっとしたのも束の間、戦争を画策したわけでも無く、昭和の大不況から少しでも逃れて、生活の糧を求めて渡満した人たちが、次から次へ犠牲となりました。

十一月初旬、音信不通だった姉たちが、大連より戻って来ました。拉致、強盗、強姦など悲惨な行為が横行している物騒な中を旅してよく無事に帰ることができたが、これを「天佑神助」と言うのだと思つたものです。けれども、十四歳の姉には背負いきれないほどの三カ月のストレスの後遺症からか、再会した直後から吐き気、頭痛が続き、何カ月も半病人状態となりました。その一方で、健康を取り戻した兄は、学校が閉鎖されているために、同胞の情報が集まる日本人会に毎日通っていました。役員は次々に連行されたり、行方不明になったりしていましたが、難民、在留邦人対策などの解決、対応をしなければならぬいろいろな問題があつて、兄は引揚げ開始まで会の仕事に携わりました。

冬になるとビル内にいる小学生を対象に、一年生から六年生までの寺子屋方式の学校が始まり、女学校の先生から簡単な数学や唱歌などの授業を受け、『箱根八里』『荒城の月』『故郷の廃家』な

どを歌い、日本の心を受け止め、暗い日の続いていた毎日に明るさを見付けたような気分になりました。付近からも生徒が集まって、教室はいっぱいになっていました。一方で兄や姉たちは、ビルの三階にいた東京海上の明石さんが、「これから英語の時代だから、中学生、女学生に英語を教えよう」ということで、英語の勉強を始めていました。明石さんは上海の東亜同文書院の卒業生で、視野の広い人でした。

十二月になると、ソフィスカヤ寺院から地代を請求され、七人家族はひと間にまとまり、他の部屋は会社に空け渡しましたが、将来の見通しも無く明日の生活のことを考えると、地代などの出費はできる限り節約するしかなかったのですが、追い出されなかっただけ幸運でした。

隣組から難民の人たちに寄附の呼び掛けがあり、母は布団、毛布、それにお金を寄附しましたが、年が明けて、登喜和百貨店に収容されていた避難民の人たちが、寒い冬を越すことができず

に、集団自決をするという悲惨なことが起きました。零下三〇度以下になるハルビンで生きる道を閉ざされ、栄養失調、伝染病、それに戦犯の重責を負われ、戦勝国の理不尽な圧政や、暴徒に追い詰められた無惨な最期を知り、言うべき言葉を失いました。一日一日身の細る思いで、明日のない日を生きていた邦人たちを助けることはできませんでした。明日は我が身の運命でもありません。

桃山小学校も避難民で満杯のところ、寒さが厳しくなるにしたがって死者も続出し、校庭に遺体を埋められなくなり、スンガリーに遺体を運んでいました。ワシリー先生も、住む家もお金も身寄りも無く、小使い室に住んでいましたが、親切な中国人の小使いさんに看取られながら亡くなり、遺体はスンガリーへ流されました。祖国を追われた弱い人間は哀れでした。

我が家の生活費の供給源であった会社は、敗戦と同時にその機能を停止し、保有していた国債

や、満鉄の株券などは紙屑同然となり、金融機関は閉鎖してしまい、ソ連の赤い軍票、八路軍の青い軍票、そして従来からの満州国紙幣の三通りの紙幣が通用する状況となっていました。母は、十九世紀末シカゴで製造された連弾用のピアノを、中国人の資産家に売って、満州国紙幣で一年分の生活費を確保することができました。ビルの前のバザールでは、お金さえ持つて行けば統制品の砂糖や、メリケン粉など、食糧品や日用品は何でも手に入れることができました。

終戦までひっそりとしていたバザールには、どこにこのような品物が貯蔵されていたのかと思う物や、日本人から略奪した品物などが並び、闇市は活況を見せていました。何千年の間、頼りにならない政権の元で生きてきた中国人のしたたかさが、この事態になって発揮されていたようです。

母も、ユダヤ人の経営する化粧品工場へ働きに行き、この先何年続くのか分からない籠城生活に

対処しましたが、外に出るといろいろと生きていくための有益な情報も入ってきました。

長かった冬を過ごし氷の溶け始める四月になって、やっと引揚げの話が決まりました。七月に入り、少し明るくなった気分です。寺子屋の先生と九人の生徒で、スガリへ最後の別れに行き体操をしていると、私たちと同年輩ぐらいの中国人少年が近付いて来て、先生の頭を持っていた釣竿で打ちました。先生は、間髪を入れずにその少年を投げ飛ばしましたが、少年は「あいやあ！ あいやあ！」とわめきながら、腰をさすりさすり逃げて行きました。しばらくすると、数人の大人とあの少年がやって来たので、私たちは真つ青になり、先生も緊張した顔つきになって、「みんなは、気を付けてすぐに家へ帰りなさい！」と言われました。私たちはどきどきする胸を押さえながら、急いで帰る支度をしましたが、「先生はどうなるのかしら？ 殺されたりしないかしら」と、後ろ髪を引かれる思いで家路に向かいました。

翌日、先生はどうされたかと心配しながら寺子屋に行くと、先生は笑顔で「生きて帰ったよ」と言って様子を話されました。

「中国人の一団と押し問答をしていると、国府軍の将校が来て、『老師を打つとは何事だ！ 老師は何も悪いことをしていない。少年が悪い』と大人たちに言うとうと、みんな静かになったので帰ろうとすると、将校が『一人でこのまま帰ると危ない』とジープで家まで送ってくれた。この通りぴんぴんしているよ」と言われました。みんなはほっと安心すると共に、危険を恐れずに命懸けで教育者としての心意気を示されたと思い、この先生の生徒でよかったと、しみじみ感じたものです。

しかしハルビンは、ソ連軍、八路軍、国府軍の支配権のはっきりしない状況下であって、私たちの命は危険な状態にあることに変わり無く、風前の灯のようにただ幸運を祈って生きているだけでした。

日本人会の方針で、引揚げ業務の残務が全部終わる九月下旬、私たちはハルビン発の最後の列車で引揚げの途に就きました。持ち帰れない荷物は、すべて妹の命の恩人である王さんに渡ししました。王さんは、「ハルビンの食事をたくさん食べて、元気で日本に帰って下さい」と言って、中国料理の送別会を開いてくれました。私たち一家は、込み上げてくる思いと涙を抑えながら、二度と口にするには無いであろうハルビン最後の晩さんを頂きました。さらに、携行する食糧も準備してもらいました。その後、王さんとは連絡が絶えましたが、元気で生きていることを祈るばかりです。

九月も十日が過ぎるころには、会社のビルの住人も引き揚げて行き、空室には市の方で封印がさされていましたが、住み心地のよい部屋は、国府軍の将校の宿舎となっていました。

我が家と、自分の意志で残留を決めた野木常務の一家で数日を過ごしていましたが、静かにな

り、夜などは寒々としていました。モストワヤ街は中国人街に変わり、明治以来先輩たちの築いた有形無形の財産は、何もかも失ってしまいました。

九月二十日、ハルビンを出発しました。大連から姉たちと一緒にハルビンに戻っていたいとこの喜代野さんは、中国人の乳母となっていました。結核にかかり苦労していましたが、母が薬やお金を援助して、一歳の長男と共に引き揚げました。主人はバイカル湖の凍土に眠っています。藤之助兄も、シベリアのバナウル収容所で病死したそうです。数々の悲劇を残して祖国への道に向かいました。

あとの話ですが、一緒に残っていた野木常務は、私共がハルビンを去った後に次男を亡くし、自分は刑務所に入れられるなど散々な目に遭い、自由貿易の希望は絶たれ、昭和二十九年に傷心の帰国をされました。

ハルビンから無蓋貨車で第二松花江シニウカカコウに着くと、

国共内戦によって線路が爆破されていて全員歩かされましたが、荷物が重く歩けなくなり、大切な食糧を半分捨てざるを得ませんでした。持っている物は夜具、衣類、食器などで、不要な物は何一つありませんでしたが、涙を飲んで手放していきましました。

新京（長春）、奉天（瀋陽）では、満鉄の空社宅で列車待ちをしていました。雨が降れば濡れ、晴天となると干し、食事は薄い高粱コウライヤンの重湯に、二十粒ほどの実や、二枚ばかりの青菜が浮いている食事で過ごしていました。金州に着いたころには、手持ちの食糧は底をつき栄養失調となり、そのうえ風呂に入らないので皮膚はかさかさで、できものはじゆくじゆくと乾かず、そこに虱などがたかっています。大きな病気にならないのが幸いでした。日本に帰れるという希望だけが生きる力になっていました。

ハルビンを出発して約一カ月、やっと引揚船に乗船する葫蘆島コロトウに着きました。十月も下旬になる

と初冬の季節となり、乗船待ちの埠頭倉庫での夜は冷え込みも厳しく、弱り切った体には寒さが堪えてきました。

千数百人が乗り込んだ貨物船は大きく、中央が吹き抜けになっていて、デッキから船底をのぞくと、五段階になっている船倉には引揚者がぎっしりと詰まっていました。白い服を着た元気そうな船員さんを見ると、救世主にやつと会えたという気持ちになりました。しかし、引揚船にやつと乗れたというのに船内で死亡する人があつて、水葬の悲しい汽笛が度々鳴っていました。私たちの隣に座った若い親子は、真新しい布に包んだ遺骨を抱えています。が、官吏であつた父親は、引揚げが決まったというのに処刑されたそうです。涙も枯れ果てた姿に、慰める言葉もありませんでした。

船は朝鮮半島を左手に見ながら、名にし負う玄界灘を南下していました。三日目に甲板に出ると、深い緑の海に今まで見たこともない大きなた

らしいようなかつこうをしたクラゲが、涼しげにたくさん浮いていました。

ふと振り返ると、そこに同級生の伊藤君が二歳になった弟を抱いていました。目ばかり大きく、指はマツチ棒のように細くて痛々しい姿でした。

お母さんが結核で亡くなり、兄さんと姉さんも結核にかかって休んでいるので、伊藤君が妹と赤ん坊の弟の世話をしているとのことでした。父親は、名の通った企業の支店長でしたが、残留させられて、子供五人での引揚げでした。孤軍奮闘の働きでしたが、そのかいも無く、姉さんは博多上陸後に亡くなられ、恵まれた一家にも深い戦禍が刻まれた引揚げでした。

十月二十四日になると日本本土が近付き、緑に霞む島影が見え始め、みんな涙を流して感激していました。地獄を見てきた者にとっての感激は、いかなる言葉にも言い表せない思いでした。それは、あの大陸との決別の涙でもありません。

博多には十月二十五日に上陸しましたが、博多

の街には着物に日傘姿の女の人が歩いていて、平和ということを実感しました。博多に上陸して最初の食事は、玄米に干しうどんの入った炊き込みご飯で、いっぺんに生気を取り戻すような味のあるものでした。この一杯のご飯を食べられずに死んでいった、多くの人たちのことを思うと、涙が出て止まりませんでした。

祖父母の待つ丹後に向かう車窓から見る地方都市も至る所が焦土となっていて、内地でも戦禍の爪跡は深く刻まれていました。しかも、そのほとんどはそのままになっていて、胸が引き裂かれるような思いでした。

祖父は七十七歳で、隠居の身でしたが、そこに母子七人が転がり込んで世話になることになりました。避難行四十日の栄養失調は長く尾を引き、その後一年が経っても背は一センチメートルも伸びませんでした。

わら草履をはいて学校に通いました。兄と姉が高校を卒業し、私も中学を終えた年に、祖父は八

十歳で亡くなり、まだ学業半ばの私と四人の弟妹は、母と共に世の荒波の中に放り出され、生活の基盤を失い、祖父の大きかった庇護も無くなり、母一人の働きで五人が生きていかねばならなくなりました。

それでもまだ故郷では、祖父の七光りが残っていたし、父の故郷は温かく、周りの野山や海が私たちの成長を助けてくれました。兄や姉も就職難、住宅難の都会に出て懸命に生きていました。私の高校生活は、生きるための戦いとなり、学業に加えて弟妹の世話が肩に重くのしかかっています。衣服は手作り、畑仕事、そして縮緬ちりめんの賃仕事、生活に役立つことは何でも引き受けて働きました。また奨学資金、授業料の免除申請など、あらゆる手段を活用して、やっと高校を卒業、大学進学などはほど遠く夢のまた夢のことで、働くことをためらわず真っ直ぐに歩いて行きましたが、新卒の女子がやっと就職しても自活できる時代ではなく、姉との共同生活でやっと生きることがで

きました。気が付くと、私は三十歳を過ぎていました。

わが青春を顧みるに、小学五年生で敗戦の憂き目に遭い、六年生でハルビンから引き揚げるまでの一年二カ月が私の戦争でした。父は亡くなったとはいえ、その後、目に見えない父の庇護を受けて生き延びました。母や兄の中国語に支えられ、状況判断力のある同胞に守られ、そして死者に守られ、父のよき友人である中国人に助けられ、ルーブル金貨、シカゴ製のピアノにも助けられるなど、綱渡りのような生活でしたが、この時期に引き揚げる事ができた私たちは、まだ幸運でした。

あとになって知ったことですが、満州製鉄所の新浦、丸山、武蔵の三氏が、自分の命も省みずに、終戦後密かに苦勞して日本に帰り、同胞の悲惨な状況をGHQに直訴し、これが契機になって百七十万人の引揚げが実現したということでした。

父が生まれて百一年、信玄袋一つを肩にしてハルビンに行った父の願いは、貧しさからの解放でした。今は、父の時代には想像もつかないような、豊かな世になっています。しかし、それは多くの犠牲、人柱の上に成り立っているのです。平和な世を願いながら死んでいった多くの同胞の思いを、未永く伝えたいものです。

最後にもう一つ、愛国心を抱きながらソ連軍の非道な占領政策の犠牲になった、うら若き女性の最期の散りざまも忘れてはならないことと思いません。

昭和二十一年春、ソ連軍の占領下にあった、新京第八陸軍病院の従軍看護婦三十四人は、ソ連軍の徴用を受けてソ連軍の元に行き、その後も四回にわたって追加派遣の指示を受けましたが、ある夜、第一回派遣の大島看護婦が満身創痍の瀕死の身で病院にたどり着き、派遣看護婦全員が堪え難き陵辱を受けている惨状を報告して息絶えしました。この有様を慟哭した同僚二十二人の乙女は、

犠牲者を弔った後、六月二十一日の明け方近く、万斛の恨みを残して毒を飲み、自ら悲惨なる運命を選び満州の土と消えました。昭和二十三年春、同僚の胸に抱かれて日本に帰った二十二柱は、他の犠牲同僚と共に、大宮の三橋青葉霊園に建つ青葉慈蔵尊の台下に納められ、昭和三十一年六月二十一日、十年目に開眼供養が挙行されました。凛烈たる自決によってソ連軍の暴圧に抗議し、日本女性の誇りを守り抜いた白衣の天使の芳魂に、ただただ頭が下がるのみであります。

こんなことも、歳月が経過するにしたがつて忘れられていくかと思うと、心むなしさを感じてなりません。